

とりとめない考察—人新世時代の人類倫理構築に向けて

A rambling essay towards the ethics of human being in the age of Anthropocene

外岡 豊

Yutaka TONOOKA

埼玉大学名誉教授

Saitama University, Emeritus Professor,

Abstract

Viewing from long span past to the far future, orientating the direction of human being way beyond objective into subjective, with introspection on the activities of modern human beings eventually destroying the Earth, I questioned to myself what to do now for trying to build up the ethics of human being in the age of Anthropocene at the time facing the Crisis of Climate Change, which is beginning of the Anthropocene.

人新世 統合史 知の危機 情報化 創造性 健康

Anthropocene Ethics Syntagmatic-history Knowledge-Crisis Informatization Creativity Health

はじめに

本論文は第 18 回地球システム・倫理学会学術大会 2022.11.05、慶応大学三田、主題「人類はどこへ向かうのか？真の well-being を求めて」における一般発表での口頭発表を元に 2023 年度同学会年報に寄稿（審査付）したものである。やや時間が経過しているが、この口頭発表がきっかけで人新世統合学研究会を開始することになった経緯があり、関連する論文として、ここに掲載することにした。

1. 発表要旨

21 世紀に入って人類社会の行く末が見えにくくなっている今こそ、ありとあらゆる関係要素を取り込んだ統合的な歴史考察をして見るべき¹であり、そこで地球環境を破壊して来た人類の一人として人新世時代の人類倫理を自省自問しつつ、過去と未来を展望する客観を超えた主観的でもある考察を試みる。ここで人類倫理と言うのは旧来の人と人の倫理ではなく種としての人類全体の地球に対する倫理である。

そこで気になるのは技術が急激に発展して人類の知的認識力が追い付かず、その認識に基づいた適切な対応ができなくなっているのではないかということである。経済社会が巨大化し、世界規模の交易が頻繁に行われているが、企業活動の間接的な影響があっても、都会の日常の営みが遠いどこかで誰かの人生を狂わせ、取り返しがつかないような地球環境破壊を起こしていることを感知できないでいる。『誰一人取り残さず』という SDGs の目標

の心意気は良いが、自己の行為の結末を見届けることができない以上、責任を持ってそれを具体化するには程遠い現実がある。

考慮すべき事項が多岐にわたり高度に複雑化して対処できなくなっている一方で、知の劣化とでも言うべき論理的考察力の低下が進行しており、情報の洪水に溺れることなく知を奪い返す力をどう養って行くのか、知の破綻を阻止すること、それも重要な課題である。

大会の共通課題「人類はどこへ向かうべきなのか」、それに関して自分の考察もどこに向かえばよいのか、今は茫洋とした展望しかないが、浅学の身を顧みず、とりとめない考察を先に進めてみることで、その成果を心ある市民の皆様と共有することが、自分の学績を無駄にせず、僅か乍らも人新世時代の人類倫理構築につながる途と考えて、この発表の機会を活用させていただくことにした。

大会での口頭発表では表題の通り、とりとめない多岐に渡る事項について論じたが、この報告では紙幅の制約から知の破綻とそれへの対処を中心に、その一部を紹介する。

気候変動と人新世の背景に関する考察と、気候危機の解決と持続可能社会に向けた社会大変革案については既報²で述べた。本論はその補論でもあり、気候危機対応から人新世倫理へ考察を深めるものでもある。

2. 人新世時代の人類倫理構築に向けた統合史の必要性

人新世³という地球環境危機が認知された以上、これ以上の破壊は許されない。6 度目の大量絶滅がすぐにも起

こりかねないという指摘⁴⁵がある中、危機の回避への努力は全人類的な責務であり、逆向する行いは人類倫理に反する。

人新世に向き合うには宇宙史、地球史、生物進化史、人類史を重ねた歴史を統合して学び直し、類人猿や蜂蟻の社会研究も参考に、遺伝子情報の共通性認識等を通じて、人類社会を見つめ直し、自然内存在としての人類を再自覚する必要がある。現代の世界的課題解決には古代王朝から現代に至る為政者の権力闘争史、非西欧社会から見直した大航海時代以来の世界史、科学技術の発展、工業化、都市化と資本主義経済、さらに現在進行中の情報社会化がもたらした自然観や信仰心の変化等、その思想史も必要である。縄文時代から連続した持続可能社会視点からの日本史、江戸時代以前から継続して来た日本の風土における伝統的な生活や信仰心の歴史等、世界史と日本史を地球史、自然史の上に再構成して人類と地球の関係と世界と日本の歴史をあらためて俯瞰し直し、その上で人類社会の行く末を考えるべきである。そこに自分の人生、自分史を重ねることで人新世に向き合う主体的取り組みを考える6。

3. 人新世時代の歴史認識と実践

Crutzen,P は、2000年に既に顕著になっている地球気候異常は5万年以上続くだろうと予想し、それゆえ人新世から区別した新地質時代区分『人新世』を提唱した3。Crutzen は絶滅に言及はしていなかったが、星野克美『人新世の絶滅学』⁴¹は、それが6度目の絶滅を招くとする警告が多数なされて来たことを紹介している。UNDP は国連総会に突然恐竜が入って来て、「絶滅を選択するな」という演説を行う動画を既に2021年11月に公開していた⁵。これらに共通する文脈は気候危機を放置し続けると地球環境の破壊が急激に進行し、結果として絶滅に至るという警告である。またIPCC 統合報告(2023.3)では、「この10年の選択や行動は、現在から数千年先にまで影響する」と警告している⁷。

ここで難しいのは日常生活と地質時代区分の時間規模が違いすぎることである。これをどう接合して大多数の市民の意識に人新世の視点を取り込むか、極端に違う時間規模を同時に取り扱う視点の獲得、目先数年から万年単位までの切り替えに慣れること(思考訓練)が急務である。

そして地球規模万年単位存在の一部としての人類を自然史の一部として俯瞰し、一方でこの人新世時代を迎えて、気候危機非常事態において、現在の人類とその一人としての自分を意識し、一主体、一主体として、絶滅を視野に入れた思想、哲学を模索し、それに基づく日常生活を具体化することが求められている。

4. 知の破綻の背景

人新世の危機へ向かわせる原動力として Great Acceleration³大加速があることは広く指摘されている通りであるが、情報技術の急激な進展の背景には人類社会における異常の累積があることは、筆者独自の考察²として展開して来た。夏目漱石が不安視して恐れていた科学の発展は、とくに情報技術において、まさに今、爆発的な展開を見せている。ブロックチェーン、メタバース、そして生成AIが世間をにぎわしているが、化石燃料の大量使用が気候危機をもたらして大問題に直面している脇で、情報技術の大加速をもたらす新たな危機的な状況、それが今、急に顕在化しつつある。また、こうした電子情報の爆発は電力需要を急増させ気候危機を加速する点でも危険である。

5. 知の破綻—処理不能事態

科学技術の発展と経済のGlobal化に伴い世界中の市民が知っておかなければならないことが幾何級数的に増大している。旧来の紙文書ではなく電子化し、更に次々に出て来る新しい情報技術への対応も迫られている。認知力、判断力を超えた多種多様な情報襲来と選択強要には無責任な対応を迫られることも多い。例えば感染症やワクチンへの対応等、医学知識もない市民に自己責任の選択を迫られても何が的確な対応なのかわからない。政府も専門家も不可知への対応に関して、責任を取れない決断をしているのではないか。

6. 知の破綻—自然存在の忘却

情報技術の急激な発展の影響でデジタル化したバーチャル(虚)情報が大量に流入し、それと向き合うことで生身の人間との対話や自然と向き合う機会が減っている。活きた現場の経験が減ることで全体性を見る目が失われ、歴史の継承者としての自他存在を忘れ、肌感覚で事態を受け止める感性が弱体化し、感情や靈魂を持った存在としての人間、生物の一員であり、地球の分身であるという自覚をなくし、増々土から離れて行っている。

7. 知の破綻—当事者責任の回避

客観科学思考は主体性、当事者意識を希薄化する。物もサービスも人材も、操作の対象として、商品として見る貨幣経済思考に慣らされて冷酷化している。企業は利益追求のため、速度優先で、余計なことを考えまいとする態度が横行し、それが社会的に許容されて来た。

しかし、一方で元国連事務総長コフィー・アナン(1938~2018.8.18、初めて事務職員から総長になった。筆者が別稿でも述べるSDGsに関する活動を行っているのは、世界中の人々が彼の熱意に応えるべき、と思うからである。)等の努力で社会や環境に配慮する企業倫理が問われるように変化し出してもいる。

8. 知の破綻—全体智の懐失

研究の進化に伴い専門分化し、全体知を見る学者が減少している。社会や組織の巨大化に伴い、それが長期間継続されることを通じて、分断化された組織で、決められた役割分担の中で、思考停止を招き、部分最適の追及に埋没し、全体を包括的に見る機会が失われていることが多い。

政府においても縦割分化された組織の日常業務からはみ出した根本的な課題に向き合うことは追加的な取り組みを要するため、社会的に重要な根幹に関わる問題が労働時間容量、人的能力容量の制約から後回しにして避けられ、いつの間にか顧みられることもなくなっている事項も多い。

研究においても分野横断的な課題、答えを出しにくい課題についてじっくり討論する場も時間もなく、重要性の指摘を行っても、その先に具体的な検討や考察がなされず、未解決な課題が長い間残されたままであることが多い。こうしたことが失われた30年の実態の一部となっている。

9. 知の破綻—研究能力の衰退

気候危機のような、早急な対応、根本的な対応が求められる緊急課題において要求されるものは、研究課題の全体性を特定分野を超えて俯瞰する哲学的な考察、問題の全体構造的な把握、具体的な実態の解明、その定量化、理学、工学、社会学、経済学等多岐にわたる学問分野の研究蓄積を総動員して活用した対応である。

一方で研究者の基礎能力が低下傾向にあるのではないかと思うことが増えている。研究企画の段階で的確な研究構想が描けていないため有益な結果を導けない研究も多い。また、共通して言えることは分析結果と研究対象の実体像との乖離に関して適切な想像力を持った考察ができず、その含意を適切に読み取ることができない場合が多いことである。

気候危機に関する研究例では、その緊急性、研究課題の重要性、社会的な意義等について十分な意識がないため、真摯な態度でより深い考察をして研究の目的に迫ろうとする意欲に欠けていたりする。

10. 学問における全体性の回復

既存の学問体系では特定の専門視点に限定して対象を論じる事が多い。とくに既往の客観科学では、各個の間人も、経済学では経済人格としてだけ扱った市場参加者であったり、薬学では医薬効能の対象であったり、人格を持った生身の人間としてではなく無機質な扱いをすることが当然視されている。全体性を取り戻すために、これを完全に改めることを意図的に考える。研究行為における観察者も、被観察者も、個人史、社会史から人類史まで、重畳的な歴史を背負った存在として扱うと同時に、誰かの子であること、あるいは血縁関係はなくとも、次世代とそ

の先の人類につながる存在として扱う。どのような人であれ個の存在を尊重するとともに、世界人類の一員であり、地球の分身であり、宇宙内存在であることも同時に視野に入れておく。研究、考察する主体、学問の行為者は客観分析者であることに拘るよりも、当事者同士であることを重視する。対象を特定して抽象化した分析だけでなく、その周囲と共にある姿を記述的(narrative)に描写するような手法も望ましい方向に合致する。基本姿勢として学術価値を認知してもらう成果志向の研究より、人格の涵養としての学問であることをめざす。

11. 知の再統合

細分化された学問を一人が多分野を研究することである程度取り返すことは可能であり、高等教育でも様々な取り組みはなされてはいるが、もっと踏み込んだ統合が求められている。それは知の営みを哲学的考察への拡張と現場的な実践への拡張と両方向に拡張することで、ある程度達成できる。

研究、学問だけでなく技術と芸術、芸能も技能も、信仰や宗教やその呪術や儀式等々あらゆる営為を区別せず、何らかの社会的なつながりを持つ行為として、主体性の発揮、創造性の発意として扱う事が望まれる。

ことに大学受験を頂点とする入試選抜が義務教育の体系に影響してきた経緯が定着して来た結果、美術も音楽も保健体育も片隅に追いやられ、身体性や霊的なものや文化とつながった総合人格的な活動を疎外している。社会内存在としての芸術理解が歪められたままになっていたり、身心の健康という大切なことが疎かになっていたりする。そして大切なものを粗末に扱っているという自覚がない。

気候危機の非常事態という全人類が押し詰まった状況に追い込まれている時代においてこそ、芸術の社会的意義は大きい、それがとかく社会的な地位収入や職能上の知見や資格取得につながりやすい教科的な知識に阻害されて、芸術の本来の意味が理解されないままになっている。そうした中で社会における芸術の意義を取り返すことが強く求められている⁸。ここでは特に芸術の意義を強調しておきたい。

ここで象徴的に言う「統合」が意味するものは、匠(たくみ)の技(わざ)に象徴されるような素材や風土と向き合って適切な物を作り上げる伝統的な生業(なりわい)の復興も含まれており、そのことは一見人新世危機回避と無関係に見えるかもしれないが、自然風土とじかに向き合った人々の生き様の積み重ねが、社会の健全化と自然との関係を旧来の循環型に回帰させる(内化⁹)の近道かも知れないと考えている。

12. 創造性と健康の奪回に向けて

日本では学校教育の充実が皮肉なことに各人の創造性

を奪っていないか。学習塾の熱心な指導は理解力の助けになっているだろうが、放課後から夜まで教科的な学習以外に振り向けるべき時間を教科的な学習の延長に多大な時間を使わせている。善かれと思って始めた指導は進学競争を助長し、結果として劣等生を生んだり社会的格差、分断を招いてはいないか。生まれながらの創造性を発揮させれば誰にも大きな潜在能力があるとの指摘もある¹⁰。それを発揮できれば誰もが伸び伸びと成長し活き活きした人生を楽しめるだろう¹¹。

医療も、その向上により医療による病気治癒という関係が定着し、元来の心身の健康保持能力を疎外し、真の意味の健康を忘れさせてはいないか¹²。人新世の時代に健全な地球を目指すという願望と自己矛盾しない人生の探求には、健康な自己と創造性の発揮が具現化されなければ格好がつかない。

隗より始めよ、人新世時代の人類倫理は自身の健康と創造性追求をしつつ社会に向かっても訴求して行くべきものである。真の健康とは、澁刺と生き、深く眠り、人生を全うして安らかに死ぬことである(野口晴哉)¹¹。誰にもある創造性を発揮させるには様々な呪縛を解かねばならないが、自然と向き合い、創意工夫せざるを得ない場面を経験すれば自ずと出て来るのではないか。

13. 指標の呪縛を解く

学歴差別や社会的地位の格付けの背景にあるものは一指標評価の弊害である。私は指標が実態を疎外すると言って来たが、スカラ量指標が悪さをしている。マルクス経済学の商品化と構図は同じである。指標によって煽られた競争で社会や個人が苛まれているが、同様に企業間競争が大加速を煽り環境負荷を増大させている。気候危機に直面し人新世に突入した現在、非常事態と認識するならばこのような指標を排して競争を強制的に止めて指標の呪縛からの解放を図るべきである。

14. 人新世統合学の構築

人新世という新時代の初期において学問の体系もそれに応じて大きな変革が求められていよう。研究者各自が必要と感じたら即、その分野をかじって見ること、そこから始まる。星野克美著では食欲に広く哲学論も取り入れているが、統合学については秋山知宏¹³が研鑽を重ねており、人新世統合学研究会¹⁴を中心に模索して行く予定である。

注

- 1: 2022.9.17 研究例会、羽田 正『グローバルヒストリーと歴史叙述の立場性』でも討論した。
- 2: 外岡 豊: ポストコロナグリーンリカバリーと気候変動-災い転じて福となせるか、地球システム・倫理学会会報 No.16,2021,p104-109, 2021.10.25, 2020 年 11.14 口頭発表

- 3 : Crutzen,Paul J.,Stoermer,Eugene F. : “Anthropocene” ,IGBP News Letter, Global Change No.41. 2000May,p17-18
- 4 : 星野克美,人新世の絶滅学,鳥影社,2022.11 当学会第 18 回大会 2022.11.5(慶応大学三田)で発表
- 5 : UNDP, 絶滅を選ぶな (動画) 2021.11.01 <https://www.undp.org/ja/japan/press-releases/>
- 6 : 1 の図 1、今ここ私を宇宙史に位置付ける
- 7 : IPCC,AR6 Synthesis Report,Climate Change 2023<https://www.ipcc.ch/report/ar6/syr/>
- 8:青山昌文は放送大学講義において本来の芸術と社会の関係について熱く語っている。
- 9: 内化は外化の反対概念で、筆者の創出ではないが多くは語られていない。外化とは人体に内在した機能を代替する独立した外在物の出現を意味し、わかりやすい例は手の延長としての道具が、機械になることである。外化は大加速の背景にある重要要素だが、第 18 回大会での口頭発表では触れなかったので詳しくは別の機会に譲る。
- 10: 徳山暉純の主張。天才とは先天的な才能を意味し誰もが潜在的に持っているとする。美大卒でないが大きな曼荼羅天井画を描いてそれを実証した。実業家として大成した鮎川義介の『天賦の才力を捧げん』とする経営哲学を信奉。教科学習は後天的な能力増強につながるが、それにばかり時間を費やしてはせっかくの先天的な能力発揮を邪魔してしまう。
- 11: 野口晴哉の主張。生物として内在する自己健康保持能力を発揮させることが、健康ですがすがしい人生を送る基礎であり、それにより快眠と安楽死が得られるとして、『整体』という健康保持法を創始し普及させた。筆者もその会員。
- 12: 外岡 豊: 気候危機と SDGs の先へ 外化と内化ー真の持続可能性に向けた基礎理論,建築と社会,Vol103,No1202,2022.5,p12-13
- 13: 秋山知宏: 統合学の基礎付け: 新たな文明のパラダイムを求めて, 地球システム・倫理学会, 第 13 回大会,2017.11.11 口頭発表(上智大学)
- 14: 人新世統合学研究会,星野克美,西原智昭,外岡豊(18 回大会同室発表), 秋山知宏他で開始した

地球システム・倫理学会第 18 回学術大会学術大会 2022.11.05、慶応大学三田

主題「人類はどこへ向かうのか? 真の well-being を求めて」大会趣旨:

気候変動、パンデミック、そしてロシアのウクライナ侵攻がもたらす諸問題は、いずれも人類文明の加速度的発達、一方でその担い手である人類に未曾有の繁栄をもたらし、デジタル技術による更なる進歩への期待を抱

かせながら、他方でさまざまな深刻な問題を引き起こしていることの表象である。それらは自然生態系の破壊、人類内部の争いと社会の分断、それらがもたらし兼ねない地球上の生命の「6度目の大量絶滅」の危機である。

これらの課題はいずれも複雑かつ相互に関連しているため、単独で解決できるものではない。人類の叡智を結集しなければならない。そこで見落とししてならないのは、それらの解決の糸口を見つけ、相互関連性をほぐしていけるのは人間でしかないことである。そしてその為にはひとりひとりが充実した心をもって「人間はどうあるべきか」、「どこへ向かうべきか」を考え、それに応えて高いモチベーションをもちつつ最新のテクノロジーを駆使できる社会を創設していくことである。

本大会では、長谷山彰前塾長を始めとする慶應義塾大学の協力を得て、不確実性を乗り越えて新しい社会の創造を積極的に行うための仕組みと人材の育成について議論を展開し、世に問うこととしたい。

(著者がかねてから本学会で発表してきたことと重なる部分も多い)

付記

本論文は地球システム・倫理学会学術大会 2022.11.05、慶応大学三田、主題「人類はどこへ向かうのか？真の well-being を求めて」における一般発表での口頭発表を元に 2023 年度年報に寄稿（審査付）したものである。上記と注 14 にもあるように、この発表がきっかけで、同室発表（座長は山脇直司副会長）した星野克美から、自分は超高齢で研究継続できないが、人新世に突入した人類と地球環境について若い世代に向けて訴える研究活動をしてほしいとの突然の要望を聞き入れて西原智昭と二人で世話人となり人新世統合学研究会を開始した。設立当初から富樫豊主催者の ZOOM 会議として運営され、人災防止談話会と並行して開催する研究会として今日まで継続している。なお、口頭発表では人新世、地球環境危機そのものについても図表をそえて発表した。年報掲載論文は 5 千字以内という紙幅の制約から本稿では地球環境危機については割愛している。